高崎学検定講座

高崎市市民活動センター・ソシアス
令和7年6月14日（土）
たかさき紅の会　吉村晴子

高崎の染色　紅板締めを復元して

吉村染工場の記録

高崎周辺の西上州は養蚕が盛んで、繭の出荷と共に副業として細い生糸をいざり機で織った生絹（きぎぬ）が生産され、田町の絹市場で盛んな取引があり「お江戸みたけりゃ高崎田町」と唄われる賑わいでした。

私の家は白絹を精錬し赤く染める北関東一の紅専門工場でした。初代平兵衛は武州熊谷で蘇芳染（すおうぞめ）の技を習得し、榛名から下る長野堰の良質な水と豊富な白絹の取引に惹かれて、弘化2（1845）年相生町に土地を求め染物の仕事を始めました。私の祖父四代平七は昭和7（1932）年に時代の流れに押されて染工場の幕を下ろすまでの、自分の奮闘の証としてまた先祖の苦労に畏敬の念を込めて、江戸末期から昭和にかけて87年間にわたる様々な證文、帳簿、写真、新聞記事、高崎の染色業の躍進の記録、貴重な紅板締めの型板を纏めて沢山の資料を残しております。

赤坂村の名主の証人を得て土地の購入、火事に合い絹問屋からの借入と返済ずみ証文、工場と居宅の手書き見取り図、蒸気蒸し汽灌の設置書、各種の貸し借り證文、市内の絹問屋からの染め代受けとり帳簿、納品控え帳、石炭買入れ帳、東京の染料店へ各種染料の注文や納品の郵便、職人の人数や現況報告の工場調査票、市役所・税務署へ納税額の記録、染料高騰の書等々、和綴じの手書き帖やら吉村染工場特製の革張り帳簿などに記録されています。また長野堰の流れを前に法被姿の職人も写しこんだ堅牢（けんろう）紅（べに）専門吉村染工場の店頭写真、六角塔を掲げた煉瓦造りの工場の前に荷車に山のように乗せた白絹と職人の姿の写真もあります。

祖父平七は若い頃体格もよく父母と共によく働き工場も隆盛をむかえました。高崎の写真館で毎年のように撮った肖像写真や、流行の自転車と共に小僧を連れた立ち姿など沢山残しています。発展する高崎市のなかで木材会社や牛乳事業に手を出して、家訓の中で戒められている書付もみられます。紅染で真っ赤になった手を警察官に見咎められた事もあったと聞いています。名入りの袢纏（はんてん）や皮羽織、義太夫を語り漆塗りの見台や湯呑など。市会議員や区長などの役職をもち活躍していた姿もあります。

紅染の専門工場として工夫を積み重ね、明治8年には新たな化学染料を使った「猩猩紅染(しょうじょうべにぞめ)」の研究を始め、天然染料からの転換を図り2年後第1回内国博覧会に出品しています。明治18年には色落ちしにくい染色技術「堅牢紅染(けんろうべにぞめ)」を開発して、数年後には京都にも劣らない染となり高崎絹の名を高めます。

明治45(1912)年に4代吉村平七が中心となり、高崎染業組合を結成し県の塚越技師を迎えて化学染料の講習会を行い、高崎市の補助を得て染色研究所をつくり会報を発行。大正5(1916)年高崎絹市場にて連合協議会主催の展示会を盛大に開催しています。この活動の賞状や看板、印刷物など様々残っております。この頃高崎の問屋が京都に発注していた金額が莫大になり、高崎の業者一同は地元の需要をめざして懸命に取り組んでいました。

平七は隠居してから「吉村家之記録」「未忘録」の冊子にこれらの記録を丹念に整理しております。当時の上州新聞に投稿した高崎の染色事業を憂い発展を願う記事の切り抜きがみられます。大正6年「紅染め業者之前途」「高崎市の染色業　其の光栄ある歴史をして益々光輝を発揚せしめよ」「重要物産としての高崎絹」「前橋勝山染工場を観る」等表題にみる心意気を読み取れます。

大正14年3月の「吉村家八十年乃祝に付き祝辞」のなかには、創業から今までの借入金返済の努力の経緯や、蘇芳染から鉱物染料への変換の苦心、世界大戦による大きな景気の変動が述べられています。廃業した後昭和20年3月10日には「吉村家紅染業創立以100年の記念祝賀会にあたり謹んで奉告す」の一文もあり、後半の記述に「昭和年度に至り時代変転烈しく、同業者の競争激烈にして日増しに高まり有り一般何れの店にても営業上の取引上駆け引きやら熱々なる主断の盡し居る時代となり、我々如き誠実真面目な者は是れに乗する事叶わず事業困難となり、母よね子と熟議相談の結果、昭和7年7月30日を以て高崎税務署へ休業届をなしたり。祖先の開始したる業を廃業するは慚愧に絶えず申し訳なき次第なれど時代要求にて致し方なくここに涙を呑んで自覚しました。過去を考慮すると実に感慨無量です。」とあります。

戦後、農地解放や財産税など国の財政政策の荒波を、受け止めてきました。いくつかの建物や倉を解体する時に、庭先で杖をつき終日じっと見届けていた祖父の姿をありありと、今となりては涙で思いやります。

一つの業態の発足から全盛期を経て終焉まで、記され残された様々な資料群からその意味を読み取り、携わった家族の生活風俗の変化などと合わせて一地方の産業経済史の一端と受け取ることができると思います。

紅絹染と紅板締め

私が幼かった頃、文庫蔵の暗がりに映えた赤き紅絹(もみ)の色を胸深く思いだします。艶やかな光沢の紅絹は身に着けて心地よく、保湿効果ありとして身を守るとされました。紅白の薄絹地は祝福や願いの色として人々の暮らしに贈答に愛好されました。赤は火の色命の色として神秘的な力を持ち、魅惑的な美しさは多くの衣装に使われてきました。浮世絵に描かれる女性の袖口に裾先にこぼれる無地や細かな文様は、艶めいて日本美の情趣を感じさせます。

赤白に染め分けられた文様の紅板締めの薄絹は、地味な彩の表着物の下に重ねる間着の胴裏や袖裏に使われ、外からは見えない所に驚く程の美をいれる独特の美意識を生みだしました。

女性を優しく包んだ紅絹や紅板締めの染色が高崎から消え長い時を経ました。祖父は隠居して後は往年の盛業時の事を時折話しましたが、私は自分の新しい生活に懸命で、紅絹や紅板締めの技法について特に聞き出すこともありませんでした。染屋の娘を意識したことも無く、医院を開業した夫に協力して子育てのなか趣味で蝋描きの染色を始め、市民展、県展、日本現代工芸展、日展などに出品し、自分の発想を額装に表現することを楽しみ、草木染やデザインの指導をしたりの日々をもちました。

平成2(1990)年ころ、群馬県繊維工業試験場の天然染料研究会に参加し、家に保存されている型板が、もう途絶えた紅板締めの貴重な品であること、12枚一組で染屋にあったのが大事な事と知りました。平成6(1994)年に高崎市百周年史の編纂の調査で高崎経済大学の高階勇輔教授から吉村染工場や絹市場の文書、写真がたいへん価値のあるものであるとご指摘いただきました。私はそのように貴重なら博物館に寄付しようかと考えましたが「型板はその家の人が傍らに置いておき型板に対する関係者の思いとともに大切にすることが値打ちです。」と言ってくださる方がいて目が覚める思いでした。

骨董店や国内のあちこちの骨董市で紅板締めの使われている間着や古布の収集を始めました。赤と白にはっきりと染抜かれた桜や菊の模様、二段階の色調で染めた二重板締め、通常は赤地に白い模様の染め抜きの配色を反転させた地白板締めなど、調べる程に紅板締めの世界は深い。縮緬の裾模様の重ね衣装は見事なものです。

「染織作品は作った人の名前は書かれていないけれど、精神の表現であり美術品」との黒田亨子氏のご示俊を胸に、技術面のご協力を新井正直氏に携わっていただくことによって「吉村染工場」という個の問題が、もっと地域に繋がるパブリックな事となり「紅絹」と「紅板締め」が美の意識につながったのです。紅板締めはなぜ途絶えたのか、現代に再生する意味はなんだろうかを考えさせられ懐古趣味になりがちの状況から脱却す

ることができました。

紅板締めの復元に向かって

平成3（1991）年頃から紅板締めの古い文献や資料を集めて、私が主宰している「染工房はるる」で蝋染、草木染をしているメンバーの賛同をもとに、「たかさき紅の会」を立ち上げ紅板締めの研究に取り組むことになりました。

平成16（2004）年群馬県「文化の芽」事業の一つとして、収集した紅板締めの間着や吉村染工場の資料の展示と講演会（高階勇輔氏・黒田享子氏・新井正直氏）を高崎哲学堂、観音山一路堂にて開催しました。

その後、ぐんま絹の里にて展示会、紅玉つくりなどのワークショップも行い、往年の高崎染色業の発展や絹文化の美、地域の生活文化の値を再発見する試みでした。平成17（2005）年にその成果を含めた冊子「よみがえる紅　高崎の絹と染工場」1000部を発刊。たくさんの反響をいただき、昭和初期に途絶えた紅板締めの復元を強くおもい立ちました。

平成17年に京都の「紅宇（べにう）」から収納されていた型板を、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に、会員と視察に訪れました。そこに文化財資料として研究保管されている状況を見学して、高崎の在野民間にある型板の、自由な活用の意味を確認しました。収蔵されているものは史料、遺産ですから、染には使えない。「紅板締めの型板が揃っていて京都から離れた絹生産の地元にのこされていたことは、たいへん意味がある」と皆で認識し是非とも復元しようということになりました。

吉村染工場では明治22（1890）年に紅板締めを開始し明治36（1903）年第5回内国博覧会の「糸好二重板締め」を出品しています。和紙に筆書きの出品解説書があり染料の分量などが記載されています。染工場を閉鎖してから生活様式も変わり、盛業当時の道具や染め方を具体的に知っておられる方は居らず、今となっては誠に口惜しく迂闊なことでした。復元の意味と縁は充分承知しての、熱意のみの取り組みとなりました。

作業への取り組み

紅の会では技法の復元作業にあたり、研究書や解説書を調べ、締め具「櫓」は「京紅板締め道具の調査報告書」の実測値をもとに、楔で打ち込み締める古い形のものを欅材にて製作いたしました。残されていた型板は7種類12枚組の「飛び鶴」「牡丹に蝶」「菊に籬」「菊花」「菖蒲」「籠目」と、彫りかけ途中の「麻の葉丸に撫子」が3枚あり、型板の製作経過が推測されました。

平成18（2006）年にこの柄を複写して新しい型板の彫を市川栄紗氏に依頼しました。模様を彫る彫刻刀も手づくりし彫の深さが均一になるように、苦心して半年かけて、上下の片彫2枚と両面彫りの中板4枚組の「麻の葉丸に撫子」の新板が彫りあがりました。更に染液で白く抜ける部分の汚れを防ぐために、表面の漆掛けを茅野恒夫氏に依頼して、10月に平成の型板が完成致しました。

旧の12枚組の型板の角は丸く摩滅しており、相当使われたようでした。割れ目が入って痛んだ部分を麻糸や金物で修繕した跡が諸所にあり、仕事道具としての手触りを実感しました。保存には危ぶまれましたが、文化財資料でなく大切に扱うこととして、実際に使うことに決めました。

作業工程は紅宇の聞き書きやいろいろな文献に当たりましたが、「型板に白絹を七重八重に重ねて挟み、櫓に掛けて締め、赤き染液を柄杓（ひしゃく）にてかける」という簡単な記述のみでした。作業の錦絵も見当たりません。職人仕事は当たり前で、詳細に書き留めることはなく見て覚えることでしょうか。それで復元作業は、推測して試してみるやり方となります。「やってみなくてはわからない」「あんな綺麗な染め上がりの布があるのだからきっとできる」面白がる探求心で始まりました。作業を進めていくと発見の連続で、その後18回にわたる復元は、滲みや斑で上手くいかない問題は、その度皆で意見を出し合いながら工夫を重ねました。

復元染色のために最初は戦前の着物の胴裏や洗い張り済みの古い絹で試作をはじめました。そして現在市販されている胴裏絹や、群馬県産の「ぐんま200」など上等ですこし厚地の絹も試みましたが、締め具合いを工夫しても染料液の浸透が困難で、染むらができたり模様の縁が滲んでしまうことが重なりました。昔の間着の手触りを改めて触ってみると、とても薄いことから新たに広幅の羽二重（目付6匁一反112g）の精錬済みの白絹を、福島県の織元から調達して使用して試みた結果、ようやく模様をはっきり染め出すことができました。胴裏と袖裏合わせて 7m必要で、薄く柔らかい絹を折り重ねることは予想以上に手がかかり難しく、昔どのような作業状態で行っていたのか切に知りたいと思いました。型板の重なりのずれを防ぎ、布を平らに張るため、平板の棒を当てて押さえたり、板を固定する台を作成したり工夫しました。

後に福島の紅花祭りに会員と訪れた際、白鷹織りの織元でステンレスの棒とナットとスパナを使用した板締め道具で染め分けているのを拝見し、早速同じ形で二基の締め櫓を新たに作成して、きつく締められるように試したところ、滲みの解決に進みました。また型板を数日水に浸して置き充分に水を含ませ板に弾力をつけることが重要と知りました。

明治初期に化学染料が輸入され、吉村染工場では東京日本橋の柴田染料店へ桃色

緋色の染料を注文した買い付け書があり、その後大正にかけて染料の種類や助剤の購入量も次第に増加して記載されています。復元に際して赤（アシットミイリングレット）黄色（カヤノルイエロウ）を使用し、混合の具合いを数回にわたって試してみて、5対5の割合で黄味がかった紅色を基準としました。昔の間着をみても様々な色合いがあり、細かい柄は明るい紅で、模様の大きくはっきりしたものは赤みの強い濃い色で染められています。酸性染料の赤と黄を7gずつ量り、温度をあげた染液を作り左右から柄杓で交互にかける。流す染液の量を一定にして染むらができないように、櫓を斜めに揺すって模様の溝に溜まった染液を流しだすようにする。この作業の詳しい記録は無いので熱心に3～4時間かけて疲れたら止めるという推測でおこないました。後に京都の記述にもっと短い時間でしたとあり試みたが、赤の色目が鮮やかにならなかったようにおもわれます。

染色後は締め枠に水をかけ余分な染料を洗い流し、締め枠を外し生地を挟んだまま水槽に入れ、型板から生地を取り出して良く濯ぐ。

この瞬間が赤と白の対比が良くでているか、滲みやずれはないか、染むらはないかの成果が出る一瞬です。いろいろな型板で試しいつもいつも何かしらの難点が出てきていたが、18回目で鮮やかに染め上がった時には、皆で大歓声を上げてよろこびました。濯いだ染布を綿布に巻き取って水気をとり、乾燥させた後、1時間、蒸気蒸し器で蒸して堅牢度をあげます。

心に沁みる赤色に励まされて一日がかりの試作18回を経て紅白にくっきり染め上がる技を確認できるようになりました。残されていた型板を、全部復元してよみあがらせました。

漆塗りの型板の精巧な彫の素晴らしさ、繕い跡に見える職人気質、型板と水の相性折り畳みに手こずる絹地の優しい手触り、紅色の色合いの微妙さ、男性の力の要る締め加減、柄杓掛けで繰り返す動作のリズム、滲むらの出る無念、型板から水の中に解き放たれた赤白の模様を眼にした時の悦び、数人がかりで一日かけて、なによりもみんなで励んだ輪の力。

たくさんのご協力と感動と感謝。御礼申し上げます。

皆の紅板締め

平成19（2007）年に「飛び鶴」「麻の葉丸に撫子」の復元紅板締めを使用した間着を作成しました。丹後ちりめんに、苅安（かりやす）の黄色、ロッグウッドの紫いろの草木染をして、裏地の紅絹も染めあげ、平成の2枚重ねの着物を三組仕立てました。

平成19（2007）年5月に高崎高島屋にて「紅の美　幻の紅板締めとその復元」展にて

発表しました。7月にNHKの「ラジオ深夜便こころの時代」に出演。全国放送となりました。引続き染工房はるるにてワークショップや研究会を続けて、群馬県繊維工業試験場で実演、染織誌の取材等、広報活動を広げてゆきました。「上州風」「風人の画布」「技に迫る」等、活動の状況や実技の記録を撮影紹介していただき、とてもありがたく思います。

平成23（2011）年に佐倉市の国立歴史民俗博物館にて京都の「紅宇」から収蔵された資料の研究発表「江戸から明治のランジェリー」の大規模な展覧会では、吉村染工場の彫りかけの版木の展示と共にロビーにて終日たかさき紅の会の復元作業の映像が流されました。

新潟柏崎市の展示会の時、地元の2名の方の家に伝わる紅板締めの衣装を拝見し北陸の文化の深さに感銘いたしました。歳を重ねた方々は記憶の中に紅絹や紅板締めの追想が残っております。現代では若い方の和服の感覚にその実感が少ないと思われました。

平成21（2009）年から5年間、群馬県立女子大学の「芸術の現場から」のカリキュラムにて毎回20数名の学生に、染工房はるるに来て頂き講義と実践のプログラムを実施いたしました。若い皆さんも赤い染や和服に強い印象を受けていただいたと思います。夢と技術を伝える作業を皆で楽しみました。

平成26（2014）年には女子大のアートマネージメント授業「伝統を現代へ」のプランの中で紅板締めの間着や布をジーパン姿に巻いたり、髪に飾ったり、とても似合って可愛らしかったです。紅板締め特有のリズミカルな繰り返しが作り出す大胆でありながら繊細な絵模様、白と赤との鮮烈な対比はかえって現代的でありました。数々のヒントを頂きその後紅板締め布を用いて扇子を製作いたしました。

平成23（2011）年「第8回世界絞り会議」が香港理工科大学に於いて開催され、シンポジウムで紅板締めの復元の発表を致しました。発信により各国からの染織や美術関係の方のワールドツアーの見学訪問が私宅にみえるようになりました。日本の伝統ある染織の技術は優秀で、京都、名古屋、東京のあと群馬に回り桐生、碓氷製糸、養蚕農家、絹の里、高崎染料植物園工芸館等へと回り、皆さん熱心な質問をなさいます。

平成24（2012）年高崎市文化賞受章者展に展示して、説明の機会を頂き、沢山の市民の方に知って頂きました。平成27（2015）年高崎シティギャラリーにおいて、個展「紅の力たどる一跡」を開催。写真集「BĒNI 紅」を500部発刊。また東京青山の「紅ミュージアム」にて2か月間、紅板締めの紹介をいたしました。その他多くの皆さまに関心を寄せていただき、県内外の各地で広報の場を広げております。

原点の紅板締め　（紅花　あかね　蘇芳）

令和2（2020）年より、高崎市染料植物園で紅板締め技法を取り上げてくださることになり、紅花、あかね、蘇芳による天然染料の紅板締めの試作研究を始めました。山形の最上紅を用いての紅花染は、職員全員の参加の板締作業で、高崎市広報課の取材をいただき記録できました。あかね、蘇芳の板締めは、最初に白絹の洗浄、ミョウバンによる先媒染の処理をして、後日水洗いをして濡れた白絹を型板に挟んで締める作業になります。ミョウバンの適正な分量は？美しい色味に合う、あかねや蘇芳の染剤の分量は？それぞれ正確な記録を取りながら、10回の作業を重ねて、見事に再現できました。

令和3（2021）年10月から工芸館で2か月間「高崎でよみがえった赤の技法」として紅板締めの展覧会が開催されました。吉村染工場の資料、コレクションした様々な技法の間着、そして紅花、あかね、蘇芳の板締め布が紹介されました。草木染の赤色は落ち着いた微妙な色合いで趣があり成功しました。

吉村染工場の創設の時代、弘化～明治初頭は蘇芳、あかねの紅紺屋でした。草木染の紅板締めは、本道であり原点回帰の想いで、感無量です。

令和4年度から、更に技法を確認して、年2回公開ワークショップで多くの方々に普及できるようになりました。貴重な型板と共に技法の伝承が公の形で引き継がれていくことができまして、本当にありがたく思います。

遥かな琉球へ

平成27（2015）年に琉球大学院生、古波蔵氏が博士論文の準備のために、わざわざ紅板締めの調査に私宅まで訪問されたことがありました。令和4（2022）年に入って、沖縄県浦添市にある「国立劇場おきなわ」より問い合わせをいただきました。明治期に終焉を迎えた琉球王朝の、芸能の復元事業をしている中で、若衆の組踊りの衣装に、紅板締めの布が用いられているとのことです。中国からの使者柵封使を迎える準備をする首里の役人の帳簿に、紅板締めの絹地を（薩摩藩に）発注している文言があること。また明治期にドイツ大使館経由で収集された、琉球王朝文化の品々が現在国立ベルリン民族博物館にあり、調査した学術書の中に紅板締めの小袖が確認されているとのことでした。また琉球戯曲集に組踊りの若衆の衣装に縮緬の紅板締めが明記されていました。

紅板締めにたいへん興味を示していただき、7月から10月迄復元した間着2着と型板、染布等が国立劇場おきなわの資料展示室に飾られました。また9月に「踊り衣装を考える」のシンポジウムが開催され、リモートで参加し復元の経過と技法の仔細を発表しました。

そして令和6年12月に組踊「大川敵討」が上演され中心の若按司の眼の覚めるようなち

りめん紅板締めの衣装を拝見しておおいに感激。本年2月の衣装研究のシンポジウムにも参加いたしました。沖縄の皆さまも途絶えた芸能を学術的に再現される熱意を持っておられ、共通の課題と思われます。

細いながらもぴんと張った絆が、紅板締めを後世に繋げてくださるでしょう。